





















































住吉社などに詣ること。長方集「紀伊二位八十島詣に、住吉にて」

やせしまつり 八十島祭(名) (八十島は諸國の義) 天皇即位の後、大嘗會の翌年、吉日を擇び使を攝津國難波に遣はし、住吉神・大依羅神・海神・垂水神・住道神等を祭る儀。國國を巡りて神を祭るべきを略して行ふものと。中宮・東宮にも亦此の儀あり。臨時祭式「八十島祭御巫」江次第八十島祭

やせしまつり 八十島巡(名) 又またの島島をめぐりあること。堀河百首鳥久方の月を遙かにながむれば、八十島めぐり見る心地する。『やせしまつり』とすること。月詠集「法皇の御時、やせしまつりに、住吉にてよめる」

やせしゆら 耶蘇宗(名) きりすとけう(基督教)に同じ。大友興廢記「十八年、きりしたん宗は西洋宗とも又耶蘇宗ともいへり」

やせせ 八十瀬(名) 又またの瀬。せせ。萬葉天のは八十瀬(さきらひぬ、ひせ)星の時待つ舟は今し漕ぐらし。同「鈴鹿河八十瀬を渡りて、誰が故か夜越えに越えむもあらなくに」

やそたける 八十梟帥(名) 又またの梟帥。多くの勇猛なる夷族の長。神武紀「八十梟帥を討つ」

やそたまし 八十五鏡(名) 又またの玉鏡。たまし(玉鏡)を見よ。神代紀「山背者採五百箇鏡坂八十玉鏡(やそたまし)此云多摩摩俱之」

やそぢ 八十(名) 年の數八十。八十はかりの妹有りけり。玉葉集「ふりにける八十ちの後を數へても、殘る齡の末ぞ久しき」

やそぢのさか 八十坂 やそさか(八十坂)に同じ。新和歌集「西の山八十ちの坂は高くとも、猶登るべき峰ぞ透けき」

やそぢな 八十綱(名) 極めて長き綱。祝詞式「遠國者八十綱を打掛引寄如事」

やそぢものを 八十伴緒(名) 又またの伴緒。八十伴男の伴緒。祝詞式「伴男八十伴男の伴緒、官官仕奉人等」萬葉ものふの夜蘇等母乃受(やそぢ)の思ふどち

やそは 八十葉(名) 古語。八十葉にて、葉の繁りて多きこと。通稱。やそは葉にて、其の皮の筋に似たればいひ、そばはそばのきの略と。仁徳紀「川くまに立ち榮ゆる、もも足らず葉蘇(やそは)の木は」

やそめ 八十綱(名) 綱の名所。たひ(綱)を見よ。

やそやま 八十山(名) 多くの山。願季集「時鳥やそやまに尋ねきて、ただ一聲は聞くべきもか」

やそよづ 八十萬(名) 極めて多くの數にいふ語。やほよづ。神代紀「八十諸神」

やた 八咫(名) 八咫の義、八咫(やま)は八咫の約にて、頭など突出したる部分の八つあること。又、そのもの。古事記「八咫は彌にて、咫(に)除れること。即ち、大なること。本朝記「八咫は八咫の稱。神代紀「八咫鏡」神武紀「八咫鏡」

やたい 屋臺(名) 屋體(名) 持ち運ぶやうに作りたる、屋根ある臺。小さき

家のさましたるもの。物を載せて賣りあ

りき、又は祭禮の邊りもの、能樂・演劇・踊り等に家に携するに用ふ。天保諺聞記「御屋體(屋臺)は長五尺九寸車軸」

やたい 野體(名) 粗野なる風體。もつれず、風俗も野體にて出でしに。色道大鑑「男子の三味線を弾く事、常の席にては野體なれども」

やたい 矢代(名) 射撃の語。射手の爲め射手を二組に別たんとする時は、先づ射手より矢一本づつ出ださしめ、之を二本づつ手に取りて交又する様に振り落とす、之に依りて上矢と下矢とを定め、次で全體の射手に就き、上矢の組と下矢の組とを編成す。眞鏡「射手検見の事、細察にて矢代ふる時は十二騎の射手の引目を取り集めて、二つに分けて二度振る也、一番の矢代の人、一番に検見をなすなり」四季草紙「矢代をふりて、上矢の射手、下矢の射手、相手となり」

やたい 矢臺(名) 矢を立ておく臺。西宮記「射場初事、御座南立、同机、其南立、御弓臺、三其東立、御矢臺」

やたい 大工(名) 家を建てるを専門とする大工。船大工などの對「武家義理物語」大工大有りしが」

やたい 矢大工(名) 「やの者の大工の義」江戶時代、幕府の命を受けて拵

問首の榿木を造る大工。

やたいじん 矢大神 矢大臣(名) 隨身門に安置せる。左方の像の俗稱。左大臣の對「神道問答」天神社の門の左右に、關祓を著し卷經の冠に懸して、劍をはき履を負ひ弓を持ちたる木像あり、是れを矢大臣といへり。『居酒屋に入り、空樽に腰をかけて居酒を飲むこと。其の姿やたいじんをさめる。極矢大神 居酒屋にて、空樽に腰を掛け居酒を飲む。やたいじんもん 矢大神門(名) ずるじんもん(隨身門)に同じ。『言節用』隨身門(やたいじんもん)に同じ。

やたいはやし 屋臺囃子(名) ばかばやし(馬鹿囃子)に同じ。

やたいびき 屋臺引(名) 宮殿・樓閣などを建てた後、屋臺を引く、定木を用ひて置くこと。

やたいほね 屋臺骨(名) 屋臺の建造の材料。屋臺の骨ぐみ。『建築せる屋臺の材料。屋臺の構造。』その家を支持するものこと。その家の財産など。

やたいみせ 屋臺店(名) 屋臺の飾り店。とこみせ。

やたら 夜盜(名) 夜、盜みをすること。又、そのもの。運歩色葉「夜盜」。新可笑記「夜盜も白日の沙汰になりぬ」

やたらな 矢のむだになる、無益に矢の費ゆるにいふ語。保元平治「己れ程の者をば矢だうなに、手取りにせん」平家物語「矢一筋では敵十人をは防がざる物を、罪作りに矢だうなにとぞ訓しける」

やたらま 馬(名) 從順ならざる馬。辨ある馬。雜兵物語「馬責める時も馬場へ牽出す時も、爪がよごれたとて既より海津・鷹敷にて馬場へひん出す、總じて喰物に念を入れて喰うまはあんべいけれど

たらに使ふ」浮世世「今此の小僧がうたつた頃は、やたらと流行るが」

やたらむしやう 矢無性(名) やたらとむしやうとの重言。めつたやたら。

やたらめつぽふ 矢無法(名) しやにむに。むやみ。

やたらう 矢太郎(名) 射撃の語。ゆめたらう(弓太郎)を見よ。

やたらじま 矢無(名) 矢無の一種。經緯の多少、廣狭不同にて、きまりのなきも。

やたらつけ 矢無漬(名) 種種の野菜をむやみに取りまぜて漬けたる漬物。

やたらひやし 矢無拍子(名) 音樂の拍子を、定律もなく只早くすること。『一説、五拍子の内の樂拍子をつつめたるもの。和歌「味源抄」八多羅拍子』

やたらす 矢無筒(名) 矢を入れ置く筒。有徳院殿御實紀附録「弓三十、毅三十、矢無筒一、鐵砲百挺」

やち 屋地(名) 家と土地と。又、やち。砂石集「屋地」を賣りて、用途五六十貫が程ありける」

やち 谷地 野地(名) 谷たる土地。澤などの湿地。續猿蓑「そのかみは谷さ地なりけらし小夜姑」

やち 野致(名) 田舎らしき風致。田野の風致。野趣。魏書「馬樹草我木、頗有野致」

やち 八千(名) 千づつ八つ。又、數の極めて多きをいふ語。「やちくさ」萬「八千」とせにあれつがしつづつ、あめの下しらしめさむと」

の者と次第明かに注して」

やたて 家建(名) 家を建てること。又その建て方。大和「狂言「都中田舎」は違つて、家建まで格別なり」

やたてがひ 動(名) 動物物中、腹足類の一種。鼓の長さ一寸四分にして長紡錘形にて、灰白色に白斑を交ふ。我が國、南海に多く産す。

やたね 矢種(名) 籠などに藏めて帯びたる矢。射つべき矢のありたけ。保元平治「矢種盡きて打ち物にあらば」

やたね 八咫鏡(名) やたか(八咫鏡)に同じ。祝詞式「神代紀「八咫鏡」神武紀「八咫鏡」

やたのからす 八咫鳥(名) やたがら(八咫鳥)に同じ。素性集「しまのかも、やたのからすを題にて歌奉れと仰せらるれば」

やたはね 矢束 矢把(名) 盛りたる矢をたばねおくもの。えびら(籠)を見よ。盛衰記「矢たばねとき、弓の弦しめして用心せり」

やたま 八田開(名) 「たはつ」の轉。柱と柱との間の廣く大きなこと。又、その處。記「率八入田開(八田開)」。『大室二』

やたもの 矢玉(名) 矢と玉と。矢のある者。

やたら 矢鱈(名) 「やたら拍子」より出でたる語。物の順序・規律などなく、むやみなること。みだり。むやみ。むしやう。むちやくちや。浮世風呂「やたら」

やたら 矢太(名) 射撃の語。ゆめたらう(弓太郎)を見よ。

やたらじま 矢無(名) 矢無の一種。經緯の多少、廣狭不同にて、きまりのなきも。

やたらつけ 矢無漬(名) 種種の野菜をむやみに取りまぜて漬けたる漬物。

やたらひやし 矢無拍子(名) 音樂の拍子を、定律もなく只早くすること。『一説、五拍子の内の樂拍子をつつめたるもの。和歌「味源抄」八多羅拍子』

やたらす 矢無筒(名) 矢を入れ置く筒。有徳院殿御實紀附録「弓三十、毅三十、矢無筒一、鐵砲百挺」

やち 屋地(名) 家と土地と。又、やち。砂石集「屋地」を賣りて、用途五六十貫が程ありける」

やち 谷地 野地(名) 谷たる土地。澤などの湿地。續猿蓑「そのかみは谷さ地なりけらし小夜姑」

やち 野致(名) 田舎らしき風致。田野の風致。野趣。魏書「馬樹草我木、頗有野致」

やち 八千(名) 千づつ八つ。又、數の極めて多きをいふ語。「やちくさ」萬「八千」とせにあれつがしつづつ、あめの下しらしめさむと」

やたら 夜盜(名) 夜、盜みをすること。又、そのもの。運歩色葉「夜盜」。新可笑記「夜盜も白日の沙汰になりぬ」

やたらな 矢のむだになる、無益に矢の費ゆるにいふ語。保元平治「己れ程の者をば矢だうなに、手取りにせん」平家物語「矢一筋では敵十人をは防がざる物を、罪作りに矢だうなにとぞ訓しける」

やたらま 馬(名) 從順ならざる馬。辨ある馬。雜兵物語「馬責める時も馬場へ牽出す時も、爪がよごれたとて既より海津・鷹敷にて馬場へひん出す、總じて喰物に念を入れて喰うまはあんべいけれど

たらに使ふ」浮世世「今此の小僧がうたつた頃は、やたらと流行るが」

やたらむしやう 矢無性(名) やたらとむしやうとの重言。めつたやたら。

やたらめつぽふ 矢無法(名) しやにむに。むやみ。

やたらう 矢太郎(名) 射撃の語。ゆめたらう(弓太郎)を見よ。

やたらじま 矢無(名) 矢無の一種。經緯の多少、廣狭不同にて、きまりのなきも。

やたらつけ 矢無漬(名) 種種の野菜をむやみに取りまぜて漬けたる漬物。

やたらひやし 矢無拍子(名) 音樂の拍子を、定律もなく只早くすること。『一説、五拍子の内の樂拍子をつつめたるもの。和歌「味源抄」八多羅拍子』

やたらす 矢無筒(名) 矢を入れ置く筒。有徳院殿御實紀附録「弓三十、毅三十、矢無筒一、鐵砲百挺」

やち 屋地(名) 家と土地と。又、やち。砂石集「屋地」を賣りて、用途五六十貫が程ありける」

やち 谷地 野地(名) 谷たる土地。澤などの湿地。續猿蓑「そのかみは谷さ地なりけらし小夜姑」

やち 野致(名) 田舎らしき風致。田野の風致。野趣。魏書「馬樹草我木、頗有野致」

やち 八千(名) 千づつ八つ。又、數の極めて多きをいふ語。「やちくさ」萬「八千」とせにあれつがしつづつ、あめの下しらしめさむと」

やたら 夜盜(名) 夜、盜みをすること。又、そのもの。運歩色葉「夜盜」。新可笑記「夜盜も白日の沙汰になりぬ」

やたらな 矢のむだになる、無益に矢の費ゆるにいふ語。保元平治「己れ程の者をば矢だうなに、手取りにせん」平家物語「矢一筋では敵十人をは防がざる物を、罪作りに矢だうなにとぞ訓しける」

やたらま 馬(名) 從順ならざる馬。辨ある馬。雜兵物語「馬責める時も馬場へ牽出す時も、爪がよごれたとて既より海津・鷹敷にて馬場へひん出す、總じて喰物に念を入れて喰うまはあんべいけれど

たらに使ふ」浮世世「今此の小僧がうたつた頃は、やたらと流行るが」

やたらむしやう 矢無性(名) やたらとむしやうとの重言。めつたやたら。

やたらめつぽふ 矢無法(名) しやにむに。むやみ。

やたらう 矢太郎(名) 射撃の語。ゆめたらう(弓太郎)を見よ。

やたらじま 矢無(名) 矢無の一種。經緯の多少、廣狭不同にて、きまりのなきも。

も、頑馬(か)になるがさぞ迷惑だんべい」

やたかかみ 八咫鏡(名) 角の八つつある、即ち八つ花形の鏡。古語。八は彌にて、咫に餘れる大きな鏡。本朝記「又直徑八寸ほどの鏡。天照大神より皇孫瓊瓊杵尊に傳へ給へるは三種の神器の」として、其の模造品の宮中にあるを賢所と申す。やたかかみ。神代紀「八咫鏡」

やたかからす 八咫鳥(名) 上古、神武天皇東征の時、嚮導のため天照大神の遣し給ひしといふ鳥。やた(八咫)を見よ。神武紀「皇祖欲中洲而山中險絶無復可行之路、乃捷邊不知其所、鼓涉、時夜夢、天照大神謂于天皇曰、朕今遣頭八咫鳥、宜以爲嚮導者、果有頭八咫鳥、空翔降中乃尋鳥所向、仰視而追之、日本紀寛政「いはれひこ見るいめさめて、耶敷賀羅須行、我れとぞ二人道は教へし」

やたかじりら 野澤十二流(名) 佛語。眞言宗の古義派なる野澤六流(即ち御流・保壽院流・西院流・華藏院流・忍辱山流・傳法院流と、小野六流、即ち安祥寺流・勸修寺流・隨心院流・理性院流・三寶院流・金剛王院流との總稱。諸宗階級別、立願所、野澤山、此の法流に者野澤十二流之岐御座候」

やたけ (名) たけ(嶽)。みね。八百番歌合「吾戀のやたけの雉子心せよ、通ふ裾野も人あさるなり」漢草「やたけみねたけ」

やたけ 彌猛(副) いやたけく。いよいたけりて。勇みに勇みて。太平記「やたか やたけ







































し、淡紅色の花冠を有す。果實は莢。概形山菜豆に似て大なり。我が國、山地に自生す。【山菜豆】とはき(山菜豆)の異名。  
**やぶはた** (名) 藪畑 (名) 藪にある畑。藪に開かれたるはたけ。續猿蓑藪畑や穂麥にとどく藪の花。  
**やぶはら** (名) 藪のある野原。藪又は原。荒れ果てたる地にいふ語。皇極紀「はるばるに琴ぞ聞こゆる鳥の野父播磨(註)源氏」源氏「さるやぶはらに年へ給ふ人を、大將殿もやんごとなくしも思ひきこえ給はじ」  
**やぶら** (名) 藪をついて蛇を出す略。やぶ(藪)の條を見よ。  
**やぶまめ** (名) 〔植〕豆科、やぶまめ属の草本。他物に絡絡する細長き莢を有す。葉は三箇の小葉より成る複葉、長き葉柄を具へて互生す。小葉は卵形、全邊。花は總狀花序に排列し、淡紫色の蝶形花冠を有す。地下に開かざる花を生じ、地上の花よりも大形の果實を結ぶ。果實は莢。種子を食用に供す。我が國、山野に自生す。ぎんまめ。  
**やぶま** (名) 〔植〕蓼科、蓼属の多年生草本。高さ二尺に達し、枝を生ずること稀なり。葉は尖端の失れる大形の廣卵形にして、對生し、質厚くして粗糲、全面に毛茸を有す。花は單性、雌雄同株、葉腋より出づる四五寸の花軸に、穗狀に排列す。我が國、原野に自生す。  
**やぶみ** (名) 〔文〕文書を矢柄に結びつけ、又は藪目の孔の中に入れて射遣はすもの。總見記「八河内通、矢文を射て御愛の事有り」醒睡笑「矢文を射使者を立て」矢の催促の手紙。たみかかけて遣す手紙。

**やぶむら** (名) 藪村 (名) 藪の中にある村里。一茶句集「藪村の貧乏なれて夕涼み」  
**やぶむら** (名) 白棠子樹 (名) 〔植〕馬鞭草科、珠葉(註)属の落葉灌木。高さ十尺餘に達す。葉は長卵形にて尖り、縁邊に鋸齒を具へ、短き葉柄を有して對生す。花は葉腋に簇生し、小形、淡紫色の合瓣花冠を有す。萼は密毛あり。果實は球形の小核果にて、紫色を呈す。我が國、山地に自生し、又觀賞用として栽培することあり。けむらさき。やむらさき。紫手。  
**やぶむら** (名) 藪紫 (名) 〔植〕こむらさき(註)の異名。  
**やぶむら** (名) 杜若 (名) 〔植〕鴨跖草科、杜若属の多年生草本。高さ一二尺餘に達す。葉は廣披針形或は長卵形にて尖り、全邊、互生す。花は圓錐花序に排列し、白色の花被を有す。我が國、山野の陰地に自生す。はなむら。めうがさ。やぶむら。みぢの異名。  
**やぶやく** (名) 藪役 (名) 江戸時代、山城國などに竹藪に課し、竹にて上納せしめたる雜稅。京都御所向大藏覺書「山竹、西之岡御領私領之村材、藪役に而、毎年八月相觸れ置、十一月致上納候」  
**やぶやしき** (名) 藪屋敷 (名) 藪のある屋敷地。續猿蓑、水仙の花の亂れや藪屋敷。  
**やぶらん** (名) 藪門冬 (名) 〔植〕百合科、麥門冬属の多年生草本。細長き葉を叢生す。葉は長さ一二尺に達し、平行脈を有す。花莖は葉腋の節より出で、一尺餘の高さに達し、花は三箇乃至五箇づつ簇生して穗狀の總狀花序に排列し、淡紫色の花被を有す。果實は黑色を呈す。我が國、山野の陰地に自生し、又觀賞用として栽培す。地下部は藥用に供す。

**やぶら** (名) 藪村 (名) 藪の中にある村里。一茶句集「藪村の貧乏なれて夕涼み」  
**やぶむら** (名) 白棠子樹 (名) 〔植〕馬鞭草科、珠葉(註)属の落葉灌木。高さ十尺餘に達す。葉は長卵形にて尖り、縁邊に鋸齒を具へ、短き葉柄を有して對生す。花は葉腋に簇生し、小形、淡紫色の合瓣花冠を有す。萼は密毛あり。果實は球形の小核果にて、紫色を呈す。我が國、山地に自生し、又觀賞用として栽培することあり。けむらさき。やむらさき。紫手。  
**やぶむら** (名) 藪紫 (名) 〔植〕こむらさき(註)の異名。  
**やぶむら** (名) 杜若 (名) 〔植〕鴨跖草科、杜若属の多年生草本。高さ一二尺餘に達す。葉は廣披針形或は長卵形にて尖り、全邊、互生す。花は圓錐花序に排列し、白色の花被を有す。我が國、山野の陰地に自生す。はなむら。めうがさ。やぶむら。みぢの異名。  
**やぶやく** (名) 藪役 (名) 江戸時代、山城國などに竹藪に課し、竹にて上納せしめたる雜稅。京都御所向大藏覺書「山竹、西之岡御領私領之村材、藪役に而、毎年八月相觸れ置、十一月致上納候」  
**やぶやしき** (名) 藪屋敷 (名) 藪のある屋敷地。續猿蓑、水仙の花の亂れや藪屋敷。  
**やぶらん** (名) 藪門冬 (名) 〔植〕百合科、麥門冬属の多年生草本。細長き葉を叢生す。葉は長さ一二尺に達し、平行脈を有す。花莖は葉腋の節より出で、一尺餘の高さに達し、花は三箇乃至五箇づつ簇生して穗狀の總狀花序に排列し、淡紫色の花被を有す。果實は黑色を呈す。我が國、山野の陰地に自生し、又觀賞用として栽培す。地下部は藥用に供す。

**やぶら** (名) 藪村 (名) 藪の中にある村里。一茶句集「藪村の貧乏なれて夕涼み」  
**やぶむら** (名) 白棠子樹 (名) 〔植〕馬鞭草科、珠葉(註)属の落葉灌木。高さ十尺餘に達す。葉は長卵形にて尖り、縁邊に鋸齒を具へ、短き葉柄を有して對生す。花は葉腋に簇生し、小形、淡紫色の合瓣花冠を有す。萼は密毛あり。果實は球形の小核果にて、紫色を呈す。我が國、山地に自生し、又觀賞用として栽培することあり。けむらさき。やむらさき。紫手。  
**やぶむら** (名) 藪紫 (名) 〔植〕こむらさき(註)の異名。  
**やぶむら** (名) 杜若 (名) 〔植〕鴨跖草科、杜若属の多年生草本。高さ一二尺餘に達す。葉は廣披針形或は長卵形にて尖り、全邊、互生す。花は圓錐花序に排列し、白色の花被を有す。我が國、山野の陰地に自生す。はなむら。めうがさ。やぶむら。みぢの異名。  
**やぶやく** (名) 藪役 (名) 江戸時代、山城國などに竹藪に課し、竹にて上納せしめたる雜稅。京都御所向大藏覺書「山竹、西之岡御領私領之村材、藪役に而、毎年八月相觸れ置、十一月致上納候」  
**やぶやしき** (名) 藪屋敷 (名) 藪のある屋敷地。續猿蓑、水仙の花の亂れや藪屋敷。  
**やぶらん** (名) 藪門冬 (名) 〔植〕百合科、麥門冬属の多年生草本。細長き葉を叢生す。葉は長さ一二尺に達し、平行脈を有す。花莖は葉腋の節より出で、一尺餘の高さに達し、花は三箇乃至五箇づつ簇生して穗狀の總狀花序に排列し、淡紫色の花被を有す。果實は黑色を呈す。我が國、山野の陰地に自生し、又觀賞用として栽培す。地下部は藥用に供す。

を屬する語。ふるこもち。宇津保國宮の鳥の舞見給ふとて、御帳の柱をおさへて立ち給へるを、あな見るしなそのやぶれこもちが物は見るとて、同。或はやぶれこもちにおはすとて、  
**やぶれこもち** (名) 破曆 (名) 破れたるこもち。ふるこもち。緋縮緬卯月紅葉と破れ曆にあらねども、あだな月を數へたよなう。  
**やぶれこもち** (名) 破衣 (名) 破れたる衣服。つづれ。又、わが衣の襟袖又は車輪。敵衣。永正五年狂歌合「襟袖はやぶれこもちとなれる身の、代を五百に買ふ人もがな」狂言「此の床に破れ衣を片しきて、夢の契り待たうよ」  
**やぶれこもち** (名) 破菖蒲 (名) 製の色目の名。表は萌黄、裏は紅梅。  
**やぶれこもち** (名) 破草履 (名) こはれたる草履。なきたさうり。  
**やぶれこもち** (名) 破生薑 (名) 〔植〕やぶれこもち(註)の異名。  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」

**やぶれこもち** (名) 破衣 (名) 破れたる衣服。つづれ。又、わが衣の襟袖又は車輪。敵衣。永正五年狂歌合「襟袖はやぶれこもちとなれる身の、代を五百に買ふ人もがな」狂言「此の床に破れ衣を片しきて、夢の契り待たうよ」  
**やぶれこもち** (名) 破菖蒲 (名) 製の色目の名。表は萌黄、裏は紅梅。  
**やぶれこもち** (名) 破草履 (名) こはれたる草履。なきたさうり。  
**やぶれこもち** (名) 破生薑 (名) 〔植〕やぶれこもち(註)の異名。  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」

**やぶれこもち** (名) 破衣 (名) 破れたる衣服。つづれ。又、わが衣の襟袖又は車輪。敵衣。永正五年狂歌合「襟袖はやぶれこもちとなれる身の、代を五百に買ふ人もがな」狂言「此の床に破れ衣を片しきて、夢の契り待たうよ」  
**やぶれこもち** (名) 破菖蒲 (名) 製の色目の名。表は萌黄、裏は紅梅。  
**やぶれこもち** (名) 破草履 (名) こはれたる草履。なきたさうり。  
**やぶれこもち** (名) 破生薑 (名) 〔植〕やぶれこもち(註)の異名。  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」

**やぶれこもち** (名) 破衣 (名) 破れたる衣服。つづれ。又、わが衣の襟袖又は車輪。敵衣。永正五年狂歌合「襟袖はやぶれこもちとなれる身の、代を五百に買ふ人もがな」狂言「此の床に破れ衣を片しきて、夢の契り待たうよ」  
**やぶれこもち** (名) 破菖蒲 (名) 製の色目の名。表は萌黄、裏は紅梅。  
**やぶれこもち** (名) 破草履 (名) こはれたる草履。なきたさうり。  
**やぶれこもち** (名) 破生薑 (名) 〔植〕やぶれこもち(註)の異名。  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」  
**やぶれこもち** (名) 破障子 (名) 破れたる障子。伊賀越道中雙六道中「破障子一枚」







**やほてん** 野暮天 極めて野暮なること。又、そのもの。諸葛太平記「野暮てんに出あはせ、はかの行くはめやう」曾我虎磨時音に聞こえた振り手の女郎、野暮てんの言葉に笑止な、ならぬならぬ」

**やほに** 八百土 (名) あまたの土。極めて多くの塊。

**やほによし** (枕) 「よしは助辭」家などを築くには多くの土を用ふるより、きづきかけていふ。記「まきむくの日しるの宮は中略夜本爾余志」いきづきの宮」

**やほはしら** 彌帆柱 (名) 船具。彌帆を張る帆柱。

**やほへ** 八百重 (名) 幾重も重なること。又、極めて多く隔たること。又、その所。神代紀「浪海原湖の八百重」

**やほや** 八百屋 (名) 野菜を賣る商家。又、それを業とする人。一代男「八百屋の五郎八」學問・技藝等の難駁なること。何事にも多少の趣味を有して手を出すこと。又、その人。

**やほやたな** 八百屋店 (名) 前條に同じ。二代男「世渡りのために、八百屋たなを出だして」

**やほやばうらう** 八百屋防風 (名) 「植」ばうらう(防風)の異名。はまばうらうの異名。

**やほやもの** 八百屋物 (名) 八百屋にて賣る品物。背物。野菜。俳諧新選「芽も春の八百屋物なり萱草」

**やほよつ** 八百萬 (數) 極めて数の多きといふ語。ちよるづ。祝詞式「八百萬(神等)神集賜也」萬「八百萬」千よるづ神の、神つとひつとひひまして」

**やほら** (副) 「一説やをらなりとも、やおらなりともいふ」そろそろ。徐々じ。徐徐と。宇治拾遺記「世の中のすまじきままには、やほら唐にや渡りなましと思ひけれども」同「しとみ風にしがかれて、谷の底に鳥のゐるやうにやほら落ちにければ」

**やほらんぢ** (名) 「植芸香」科、やほらんぢの灌木。精圓形、全邊の小葉より成る羽狀複葉を互生し、小葉は透明の小點を有す。花は長き總狀花序に排列し、小形にして柄を有す。南米ぶらじの原産。葉を耶僕蘭日葉と稱し、發汗薬として用ふ。

**やほろ** 矢母衣 (名) 服又は空襲に關する一種の母衣。裝飾の用に供す。隨兵日記「矢ほろの色は紅もえぎ」射御拾遺抄「矢ほろの事、衣あるひは紗なども、若しからず候、是れも色不定はすのかた一尺二寸綫ばす、其の際を赤き絲にても又は赤き草に黒き草を重ねても結ぶ也、服にかゝる時は袋の如く括り絲にてあるべし、紋などは其の身の好みに隨ふべき也」

**やま** 山 (名) 陸地の一部、附近の土地より隆起せるもの。山岳。記「青夜麻(に)強は鳴き」萬「あしびきの夜麻(に)も野にも」特「近江國比叡山、又、そこにある延暦寺の、古く、山の法師の許へ遣しける。世を捨てて、山に入る人、山にても猶うき時はいつち行くらん」拾



(ろ ほ や)

玉三世の中に山てふ山は多かれど、山とは比叡の御山をぞいふ。山(の)如き形せるもの。山に擬して作れるもの。山形。榮華山をたむべきやう、池を掘るべきさま。同「唐唐衣、袋の腰な、山をた「水を流し」山(の)如く多く積もること。堆なること。堆きこと。又、そのもの。

「戀の山」借金の山 古今無量なげきこる山とし高く成りぬれば、つら杖のみぞまづつかれる。宇津保書「風雲のおどろくかめの甲の上、いかなる塵か山とつもりし」宇治拾遺記「火を山の如くたきければ」山陵。陵墓。「山作の司」源頼朝「御山にまゐり侍るを、御言傳や」

「高き部分の稱」海鼠坂の山「浮世風俗」山を上げる。極點。たうげ。山を上げる。又、その時。犬子集「見れども山はまはるかなりの短短におぼれめすなよ此のまがさ」山は動きなく、又高くして仰ぎ見るより、たよりとするもの、仰ぐものに譬へていふ語。後撰「笠とりの山と頼みし君をおきて、涙の雨に濡れつつぞゆく」全體の中に最も肝要なること。最も喝采を博せしむること。又、その所。文章の山「八笑人「真中ころ(し)やんと立つと、爰が山だ中兼ねて手練の扇が山だ」山脚のする仕わざ。やまご。もくろみ。たくらみ。野心。「山を張る」八笑人「與一兵衛は、少し此の山が山が有て、その人。大友與一記「山を張る」うるはしう身を染めかには包めども、心は山のかせせきなりけり」能樂の作物の。竹にて、引廻しといふ幕の如きを掛けたるもの。曲によりて、上、柴、柳、紅葉等を挿す。曲やまほ(山)の略。狂言「賦園會中」山

の相談を致さう。織留三「一疊一步の借り機敷して、山の渡るを見せける」鶴楊弓。大弓にて、錢を賭物にする時の三錢の隠語。一語一言「賭的矢代の管掛錢の異名中三を山」使所。甲州の方言。猶、下文を見よ。甲陽軍鑑「信玄公、開所を山と被仰候故中略他國半人與衆會與市助に山といふ事を聞き候へば、與市助申すは、道理かな、のぼればくだると申すは、是れ本手かといひて、別人一年もありて、與衆日向藤九郎に山の事を問へば、藤九郎申すは、道理かな、におふて下るは辛苦さうなりといふ、其の後長坂源五郎に問へば、源五郎は、道理かな、山にはくさきが絶えぬと申す、小山田彦二郎に問へば、におふ物たえずと申すに、小宮山内膳申すは、山のおひはたきものを頼ふぞと申し候」教所の名。まるとやまのじ。北山の手。みつやま。みつやまの山。

**やまお** 山來 根切の脇の土くづる。

**やまかたかく** 山片掛 次條に同じ。萬代「あし引きの山かたかたかてて家居せし、峰の嵐にやすきいぬねす」

**やまかたつく** 山片附 山に片より附梅をな懸ひそ足引の山片就けてて家ゐせる君「千載冬夕まぐれ山片つきて立」鳥の、羽音に應を合はせつるかな」

**やまとし** たかく 山高 山の如く高く。齡の多く積もる等にいふ。古今「なげきこる山とし高く成りぬれば、つ

らづみのみぞ先つかれける」

**やまねむる** 山眠 山に活動の氣なし。冬季の山の形容にいふ。

**やまのうづぶり** 山梁 (論語)の郷黨篇に山梁雌雉とある山梁を和訓したるもの。梁は橋梁の義なるを誤り訓したる。「動」(雉)の異名。山梁(雌雉)。散木集「たるきに鳥をさしたりけるを見て、たるきには山のうづぶりさしてけり、軒ばに海の月をよどして」。

**やまのくさ** 山軸 (くさ) 軸に同じ。萬「玉くしろまき終しをも、月もへず置きてや越えむ此の山軸」

**やまのくちゆうさ** 山久住者 山寺に久しく住して修行する人。山ごもりの僧。又、特に比叡山に十二年の山ごもりせる比丘。讀史傳日記「山のくちゆうさども召したれば」

**やまのこし** 山腰 山の麓近き處。山のすそ。山腰(盛衰記)「山上の山の腰に垣橋をかき、下の大道を切り塞い」引籠る」

**やまのこびたひ** 山小頼 やまのひたひ山頼に同じ。曾我五人兄弟「山の小頼行く雲は、眉の黒みの黒黒と」

**やまのこゑ** 山聲 山に響く聲。山びふ「千五百番歌合」君が代に十たひ澄むべき水の色を、くみて知りける山の聲かな」

**やまのさかり** 山盛 山の風致の最もよきこと。山の草木などの最も繁ること。又、その頃。宇津保書「山のさかりは九月かみの十日の程になん」

**やまのさき** 山崎 山の突き出でたる所。萬「さ衣を筑波ねるの夜麻乃佐吉(やま)」、忘らえこそなをかけたなめ」

**やまのさす** 山座主 比叡山延暦寺の座主。天台座主。貫首。源「山のさす、何くれとやんごとなき僧ども」

**やまのさち** 山幸 やまさち(山寺)に同じ。神代紀「山幸(やま)にて獲りする人。山に居るかりうと。萬「むささびはこねれ求むと、あしびきの山能佐都理(やま)にありけるかも」

**やまのしたたり** 山滴 山の岩間などより滴りおたる水。諸書所は那羅の山のしたたり、菊水の流れ」

**やまのしづく** 山翠 山の木などより滴るしづく。山のしたたり。萬「あし引きの山の四付(やま)に、妹(やま)と吾れ立ち濡れぬ山の四附(やま)に」

**やまのすそ** 山裾 山の麓。山脚。すそ。著聞「山の裾に八開の家を作り」

**やまのすそだ** 山裾田 山の裾にある田。夫木立立ちさわく種なみつづきに末遠き、山のすそ田をたる秋風」

**やまのすそ** 山裾野 山の裾にある野。すそ野の夕霞、その色となく情しき春かな」

**やまのすそ** 山木 山のいただき。みね。山嶺。齊明紀「山根(やま)埋矣」祝詞式「高山之末(やま)短山之末(やま)」

**やまのたすまひ** 山竹 山の笠をたすまひ。山の姿。源「もとの木立ち、山のたすまひ、面白き所なるを」

**やまのたをり** 山たわ、た折れる所。たわ(橋)を見よ。山たわ。萬「あしびきの夜麻能多手理(やま)に、この見ゆるあまのしら雲」

**やまのつかさ** 山司 山の中に、

高き所。山の最も高き所。山頂。萬「朝にけに霜はおくらし、たかまとの山(やま)の色づく見れば」山を掌るもの。専ら山を預かり知る人。又、かりうと。唯略記「命(やま)縦獵(やま)だま(木)に同じ」

**やまのとね** 山刀 山賊の長。一説、ぬすびと。山賊。旅人いくあひだに盗人あひたり。旅人はすりもはたとむなしきを、はやくいましてね山のとねち」

**やまのとねはら** 山外腹 山腹の外。夫木立爪こる道たえぬらん、み吉野の山のとねはらに降れる白雪」

**やまのにしき** 山錦 秋山の草木の葉の紅葉するを、錦に譬へていふ語。古今「霜のたて露のぬきこそ弱からし、山の錦の織ればかつ散る」

**やまのぬし** 山主 (やまぬし) 山主に同じ。やまのさす(山座主)に同じ。拾玉「山の座主事仰せられし時、中略俊成入道の許より、雪の降りたる朝にかくいへる。降の雪心の底を聞きし時、山のぬしとは兼ねて知りなき」

**やまのね** 山根 山の根もと。即ち、ふもと。平治「山の根に附きて落ち行かれれば」

**やまのねんぶつ** 山念佛 比叡山延暦寺にてなす念佛。陰曆八月十一日より七日間、同寺の常行三昧堂にて行ふ。榮華書「八月山の念佛は、慈覺大師のじめ行給へるなり」

**やまのは** 山端 山のはし。山の一隅。萬「山之葉(やま)にいさよふ月の出でむかと、わが待つ君が夜はくたちつ」古今「山上二つなき物と思ひしを、水底に山のはならで出づる月かけ」

**やまのはな** 山鼻 山の突出せる部

分。山の先端。盛衰記「二居所は山の鼻が指し覆ひて、麓の貌に似たり」とて、麓の尾と申し附けて候」

**やまのはら** 山腹 山の中腹。山腹(やま)に同じ。佛語古選「赤土の崩れて暑し山の腹」

**やまのひたひ** 山頼 山の差し出でたる處。金桃集「我れのみぞ悲しとは思ふ、波のよる山の頼に雪の降れば」

**やまのふくら** 山袋 山腹にて、袋の如くもつたる所。赤染衛門集「いにしへに思ひ入りけん、たよりなき山のふくらのはれなるかな」

**やまのふところ** 山懐 やまふところ(山懐)に同じ。源「さるひじりの御あたり、山のふところより出できたる人、かたはなるはなかりけるこそ」

**やまのべ** 山邊 やまべ(山邊)に同じ。萬「山邊(やま)にいゆくつづきは多かれど、山にもぬにもきを鹿鳴くも」

**やまのもの** 山物 山に居るもの。山にすむもの。宇津保書「鹿の渡るとも知らず、木の葉のそよぐに驚きて、ここに山のものを音すとて」雉子・山鳥等の稱。鷹飼の詞(田)物などの對(山)に出来る果物。即ち、椎栗などの類。

**やまのゐ** 山井 やまゐ(山井)に同じ。萬「あさか山かげさ(見ゆる山井)の、浅き心を吾がもはなくに」古今「むすぶ手の拳に濁る山の井の、あかでも人に別かれぬるかな」

**やまのせ** 山尾 やま(山尾)に同じ。記「有其自所向之山尾(やま)登山上入」新六帖「山のせのゆきあひにせく池水の、入籠りしや我が身なるらん」

**やまみゆ** 山見 前途の見込み立つ。



源氏鳥帽子折「山も見えぬ胸算用」  
 やまをあげる 上山 瘴瘴の危篤の時  
 を通りす。かせ口に向かふ。太平記  
 忠臣講義「瘴瘴も山を上げ兼ねる」  
 やまをきる 錫山 山にある土石を錫  
 治して金屬を得。史記「錫山錫  
 山」  
 やまをかける 掛山 山師のわざを仕  
 かく。山を試みる。  
 やまをぬく 抜山 ばつざん 抜山に  
 同じ。其の條、及びばつざんがいつか  
 山蓋世を見よ。曾我虎磨と山を抜く  
 勇力」俳諧古選「山を抜く力も折れて  
 松の雪」  
 やまをばる 張山 山とをなす。山  
 師のわざをなす。  
 (藤)山から里 寺から里に同じ。てら(寺)  
 の條を見よ。毛吹草「折りくるや山か  
 ら里(兒櫻)」  
 (藤)山千、海千 山に千年、海に千年の時。  
 (藤)山高きが故に貴からず 外観のみ立  
 派なりとも貴しといふべからず、實質  
 ありて始めて貴ぶべし。實語教、山高  
 故不貴、以有樹爲貴、人肥故不貴、以  
 有智爲貴」  
 (藤)山高く水長し 徳などのすぐれたる  
 を、高山の壽え、大河の流るるに譬へて  
 いふ。范希文文苑英華「歌曰、雲山蒼蒼、江  
 水泱泱、先生之風、山高水長」  
 (藤)山といへば川といふ 殊更に反對す  
 るに、右といへば左。  
 (藤)山に木あれば工則ち之を度る 山  
 に樹木あれば、工人は其の長短をはか  
 りて適宜の所に用ふ。左傳「周禮  
 有之曰、山有木工則度之、實有主  
 則擇之」  
 (藤)山に千年、海に千年 山にても海にて  
 も多くの歲月を経來たれること。具さ

に世味の辛酸を嘗め盡くして老翁とな  
 れること。  
 (藤)山に頭かすして埜に置く (埜は小高  
 き處) 重大なる事には慎むを以て  
 敗れざれども、些少なる事は侮り易き  
 を以て却りて失敗を招くに譬ふ。韓非  
 子「六兵、諺云、不頭於山、而頭於埜」  
 (藤)山に舟を乗るや、不可能なる譬。  
 一可笑記「無理な事といひます、山に舟  
 をのるやうな事やといひます」  
 (藤)山のまはれぬ 獨占し、又、利益を  
 徳斷し、又は傍若無人に振るまふ等に  
 いふもの。お山の大将おれ一人。  
 (藤)山の上に又ある山 出といふ字の註。  
 (藤)山の蓬萊ほどある 物事の澤山ある  
 に譬ふ。山ほどある。  
 (藤)山はちひさき壙を覆らず 泰山は  
 土壤を覆らずに同じ。たいざん 泰山  
 の條を見よ。十訓「山はちひさき壙を  
 ゆづらず、此の故に高きことをなす」  
 (藤)山、萬歳を呼ぶ 下文の漢書の武帝  
 の故事より出でて、天下の太平なるに  
 いふ。治部省式「萬歳、萬歳、萬歳、山  
 車、山車、山車、拾遺、はるばると君が千歳  
 をまつ風、に代はるばる男山かな」漢  
 書「武帝、朕用事華山、中書更平成、呼萬  
 歳者、三石布悅曰、萬歳、山神稱之也」  
 (藤)山、矢の立つ狭間 盛衰記「萬歳、甲  
 冑をゆり合せゆり合せ、矢開をたばひて  
 振舞へば中書裏か矢こそ無かりけれ」  
 さま狹間と同じ。播州佐用軍記「五月十  
 日、弓に手矢計り取り添へて、矢狭間やま  
 を押開けて」  
 やま 一夜摩 (名) 梵「ヨモ」善時、時  
 分など調す。佛語。やまてん 夜摩  
 天に同じ。智度論「夜摩名善分天、善  
 友記「夜摩者、具云蘇夜摩、蘇者此云、探

也、夜摩者此云時也」(えんま 閻魔)に  
 同じ。  
 やま 山 (動數) 盛りあげたるものを  
 數ふる語。「二山拾錢」  
 やま 山 (種類) 同種類中にて、山野に  
 自生し、又おそろしく、太き等の意にて冠  
 らせ用ふる語。「山椿」「山犬」「山蜂」  
 やまあけ 山上 (名) 瘴瘴の山を上げ  
 ること。太平記忠臣講義「瘴瘴も山上げ  
 仕まうたれば、大役済んだ」  
 やまあきみ (名) 植「やまばくちの異  
 名。和名社、大薊、薊、生山谷者也」  
 やまあきみ (名) 植「薊科、薊、屬  
 の草本。高さ五六尺に達す。葉は羽狀に  
 分裂して、刺狀の鋸齒を有し、互生す。花  
 は頭狀花序に排列し、紫紅色の筒狀花冠  
 を具ふ。總苞は多数の鱗片より成る。開  
 生する花序は短き柄を有するか或ひは之  
 を缺く。我が國、山野に自生す。  
 やまあそび 山遊 (名) 山に行きて遊  
 ぶこと。山を遊びありこと。  
 やまあぢき 山遊 (名) 山に行きて遊  
 ぶこと。山を遊びありこと。  
 やまあは (名) 植「禾本科、やまあは屬  
 の草本。高さ三四尺に達す。葉は細長く  
 して尖り、やまが長き小舌を具へて互生す。  
 花は綠色又は帶紫色、多数集まりて長き  
 圓錐花序をなす。我が國、山野に自生す。  
 やまあひ 山開 (名) 山と山とのあ  
 ひだ。山開。拾遺「やまあひに雪の  
 ふりかかて待りけるを」馬の名所。  
 やまあふ (名) 山かききを用  
 ふるあふ。袖人などの用ふるあふ。  
 一代男「あはなき男中、山崩振り上げ  
 て」川中島合戦「腰に草鎌、山崩」  
 やまあらし 山嵐 (名) 山に吹くあ

らし。山より吹きくる嵐。古今和歌吉野  
 の山あらしも、寒く日ごとになりゆれば」  
 玉葉「山あらしの杉の葉拂ふ暗に、むら  
 むら降く雪の白雲」柔術の手。右の手  
 にて相手の右の襟を捉へ、左の手にて右  
 の袖を外部より順に捉へ、相手のいたく  
 浮き上がり来る時を見て、相手の體を釣  
 り上げながら、其の右足の踵の稍上部に  
 右足を當てて、相手の右前胸に大きく投  
 ぐるもの。  
 やまあらし 豪猪 山荒 (名) 動  
 哺乳動物中、嚙  
 齒類の一種。  
 形、兎大にして、  
 背部の毛は硬化  
 して長き棘とな  
 り、敵に遇へば  
 體を圍めてこれ  
 を防ぐ。印度、  
 亞弗利加等に居  
 し、晝間は穴居  
 し、夜出でて食  
 を求む。觀海日  
 記「安永二年、觀豪猪、中和名、山あらし」山  
 家。  
 やまあらし (名) 植「ぎやうじや  
 んにん」(善慈)の異名。白(辛夷)  
 の異名。和名「辛夷、木犀、其  
 子可嗽之」辛夷、木犀、水、其  
 やまあり 山蟻 (名) 山にある蟻。  
 に産する蟻。燕村句集「山蟻のあからさ  
 まなり白牡丹」  
 やまあるき 山歩 (名) 山をあるくこ  
 と。山歩。山あそび。  
 やまあね 山靛 (名) 植「大戟科、  
 山靛屬の多年生草本。高さ二尺餘に達  
 す。葉は尖れる卵形或ひは長卵形、鋸齒  
 を有し、長き葉柄を具へて對生す。花は



(しらあまや)

單性、小形、黄緑色の花被を有す。果實は  
 鞘なり。我が國、山野の陰地に自生す。  
 昔は此の液汁を青色の染料に用ひたり。  
 やまゐ 萬葉山藍(むら)もて摺れるきぬ著  
 て」民部省式「神祇官下竹、及諸祭諸節  
 等所須、箸竹柏生蔦山藍等類」  
 やまあふり 山藍摺 (名) 山藍も  
 て衣服などに模様の摺ること。白き布  
 に、藍にて紋を摺ること。又、その摺れる  
 もの。あをすり。  
 やま-Sai (名) 植「くさいち(蓬萊)  
 の異名。  
 やま-Sai (名) 植「かほら  
 ち(蓬萊)の異名。  
 やまいぬ 山犬 (名) 山にすむ犬。  
 野生の犬。三動「哺乳動物中、食肉類の  
 一種。形犬に似たるも、體驅瘴せ、眼は一  
 層斜なり。性猛惡。我が國の深山に棲  
 む。本朝廿二卷「猿は山犬のものにとぞ  
 なりける」豺。  
 やまいぬ 疾犬 (名) きやうけん(狂  
 犬)に同じ。  
 やまいぬわらび (名) 植「水龍骨科、  
 科、おぼたにわたり屬の多年生羊齒植物。  
 地下の根茎より長き葉柄を有する。二尺  
 餘に達する葉を叢生し、葉は二回羽狀複  
 葉にして、小羽片は其の縁邊に缺刻狀の  
 鋸齒を有し、葉面は滑にして光澤を有し、  
 葉柄の下部には黒褐色の披針形毛を有  
 す。子葉群は葉の裏面に散在し、半環狀  
 を呈して被包を有す。我が國、山地陰濕  
 の地に自生す。  
 やまいぬ 山家 (名) やまが(山家)に  
 同じ。九重集「山家はすみてあだにぞな  
 りぬべき、春の心も花と見ゆれば」  
 やまいぬ (名) 植「やまのいぬ(蓬萊)の  
 異名。和名「山藍」  
 (藤)山芋の山水 粗惡なる文人畫の山水

を嘲る語。  
 やまいり 山入 (名) 山にわけ入るこ  
 と。  
 やまいりさんぢゆう 山入三重 (名)  
 三重(山)の異名。  
 やまうへひす 山鷲 (名) 山にすむ  
 鷲。野生の鷲。山鷲。植「やま  
 りさうの異名。  
 やまうへひす 山兔 (名) 山に居るうさ  
 ぎ。野生の兔。  
 やまうし 矢申 (名) 的に射たる矢の  
 中たり、外れを告ぐること。又、その者。  
 やまうし (名) 植「くさぎ(常山)  
 の異名。字鏡「蜀漆、蜀漆、蜀漆、蜀漆、  
 蜀漆」はこれら(蜀漆、蜀漆)の異名。  
 やまうし (名) 植「前條に同じ。  
 やまうし (名) 山空穂 (名) 狩りに用  
 ふるうし。一説、粟の筋粗なる空穂な  
 るべし。説、平家へ、山うしつば、高えび  
 らに、矢と多少少きし、かき負ひと(山人)  
 の音使、著開、やまうしの物を食はせ  
 りけるを」  
 やまうし 病人 (名) 病める人。病  
 人(やまうし)。土佐日記「船君のやまうし」落  
 窪「よき事とて急ぎしたるは世の笑はれ  
 草なれば、やまうしになりぬべく歎く」  
 やまうし 山獨活 (名) 山にあるう  
 ど。野生のうど。俳諧新選「山うどに木  
 貨の飯ぞ忘れぬ」  
 やまうし 山姥 (名) 山に居るとい  
 ふ女性の怪物。山をんな。諸山「山姥と  
 は山に住む鬼女とこそ、曲舞にも見えて  
 候へ」能樂の假面の一。老女の面にて  
 山姥の曲にのみ用ふるもの。  
 やまうしのかもち (名) 植「さるをが

せ(松蘿)の異名。  
 やまうし (名) 植「しゆるさう(藜蘆)  
 の異名。和名「藜蘆、藜蘆、藜蘆、藜蘆、  
 藜蘆」  
 やまうし 山梅 (名) 山にある梅の  
 木。山に自生する梅。天竺記「山梅野梅」  
 やまうし 山賣 (名) 山を賣ること  
 川「奥州の金山賣つたる、山賣の山こかし  
 とはおれがこと」山師に類する方法に  
 て、人を誘著して物を賣りつくる者。口  
 上商人、後日商人、野師の類。永閑節「や  
 ま賣りかな山賣りかな、けらけらいあん  
 てんがう、今時その手をくん、いかに  
 永代藏「博奕仲開、山賣」一山と纏め  
 て賣ること。山盛りにして賣ること。  
 やまうし (名) 植「漆樹科、漆樹屬  
 の落葉喬木。高さ三十尺に達す。葉は  
 奇數羽狀複葉、毛を有し、小葉は尖れる長  
 卵形、全邊、花は圓錐花序に排列して、小  
 形、黄色を呈す。果實は扁球形の小核果、  
 硬毛を密生す。我が國、山地に自生す。  
 效用うるしに似たり。つたうし  
 (野葛)の異名。はせのき(葛)の異名。  
 やまうし 山葡萄 (名) 植「やまぶ  
 だう)の異名。  
 やまうし (名) 植「罌粟科、紫  
 堇屬の多年生草本。地下に小塊莖  
 を有す。莖の高さ五六寸に達して、質柔  
 軟。葉は二回分裂の複葉にて、裂片は卵  
 形又は倒卵形を呈す。花は總狀に排列し  
 て、紫色を呈す。我が國、山地に自生  
 す。  
 やまうし 山奥 (名) 山の奥の方。山  
 の深きところ。  
 やまうし 山送 (名) 野邊おくり。  
 葬送。撰集抄「最後のやまおくりして、  
 なくなく、煙となし、骨をばひろひとりて」  
 やまおしろい 山白粉 (名) いぼた

らふに同じ。  
 やまおすが (名) 揚子。大弓にて錢を賭  
 物にするとき、八錢の隱語。洲賀山(やま  
 谷)の異名。  
 やまおろし 山嵐 (名) やまおろし  
 のかぜ(山下風)に同じ。後撰「心して  
 稀に吹きくる秋風、山おろしにはなき  
 じとぞ思ふ」源氏物語九月になりぬ。山嵐  
 いとはげしう、木の葉のかくる(な)くな  
 りて」芝居にて、あれれ、化物の出の時  
 する囃し。太鼓にて風の音をきかする  
 もの。  
 やまおろしのかぜ 山下風 山より吹  
 きおろす風。山のおろし。おろし。萬  
 葉集「君が見む其の日までは、山下之風、  
 けむた吹きそと」古今「君、戀しくば見  
 ても忍ばん紅葉ば、吹き散らしそ  
 山おろしの風」  
 やまが 山家 (名) 山にある家。山里  
 の家。元永元年十月内大臣家歌合、山家  
 にはならのから葉の散り敷敷て、時雨の  
 音も烈しかりけり」義經記「山家、少  
 しよから山が山がに居たりける徳人」  
 やまがらばし 山胡桃 (名) 植「樟  
 科、枸橀屬の落葉灌木。高さ五六尺餘に  
 達す。莖、葉共に香氣を有す。葉は橢圓  
 形にて尖り、全邊にして毛を有し、短き葉  
 柄を具へて互生す。花は數箇徑生し、淡  
 黄色、小形の花被を有す。果實は小形の  
 漿果、成熟したるものは黒色なり。我が  
 國、山地に自生す。いぬたんば。こなじ  
 は。とりつけしば、とりつけのき。  
 やまがらばし 山蝠蝠 (名) 動「哺  
 乳動物中、翼手類の一種。蝙蝠の一種。  
 山地の木洞又は岩窟などに棲むもの。  
 やまがらばし 赤棘蛇 (名) 動「爬蟲  
 類中、蛇類の一種。體面に朱色の細き斑  
 あり。鱗片の中央に隆起したる線を有







やまかん 山勘 (名) 山師の所行。  
やまかんり 山冠 (名) 冠の冠の  
一。岸岩などの字の頭にある山の字の  
稱。山かむり。

やまき 八巻 (名) やまきののり(八  
巻法)の略。盛衰記世八巻(法華經の序品を  
だにも知らぬ身に、八巻が木を見るぞ  
嬉しき)同。同。法の花巻に開く八ま  
きには、心佛の身とぞ成りぬる。  
やまきののり 八巻法、法華經の序品の  
異名。八巻あるよりいふ。新六帖「あ  
ひがたきやまきののりの法の紐、結ぶ  
契りはむなしからじを」

やまき 山木 (名) 山にある樹木。山  
に生ずる木。新六帖「風越しに立てるや  
まきの上枝は、花も紅葉もある時ぞなき」  
やまき 山氣 (名) 山をなす心。山師  
の如き氣質。山こころ。投機心。  
やまき 山菊 (名) 植まっつむし  
さう(山蘿蔔)の異名。白うらうさぎの  
異名。

やまきけん (名) 植葉科、紫葳  
科の草。紫葳に酷似すれども、花  
の黄色なるもの。我が國、山地に自生す。  
有毒植物なり。

やまきん (名) 動物植物中、腹足  
類の一種。陸産にして、大き碗豆大、扁平  
にて色なるもの。

やまきし 山岸 (名) 山の切り岸。  
又、山の端の水に臨みて岸となれる所。  
萬子らが名にかけのよるしき、朝妻の  
片山木之に霞たなびく。

やまきず 山疵 (名) 製造元にて製造  
の際、出来る疵。「陶器の山きず」「山きず  
のある石」

やまきは 山際 (名) 山のきは。山の  
はし。又、山のあたり。宇津保傳上「南の庭

のはるかなる水のすいまいあなた、山き  
はに立てり」枕「春は曙、やうやうしる  
くなり行く、山きは少しあかりて」  
やまきり 山霧 (名) 山にたつ霧。山  
をたちこむる霧。萬子うちたをりたむの  
山霧や霧かかも、細川の瀬に波の騒げ  
る」

やまきり (名) 植まぶらぎり(聖子  
桐)の異名。やまならしの異名。  
やまきりのこぎり 山切鋸 (名) 鋸  
の一種。袖人が立木を切るに用ふる。長  
く細狭きもの。

やまきりんぼう (名) 植まぼのき  
りんぼう(夜霧)の異名。  
やまきり 夜霧 (名) なかまく(中暮)  
同。

やまきり 山草 (名) 山の草。山に生  
ずる草。山草(名) 和泉式部集「山陰にみ  
がくれ生ふる山くさの、やまきりよ人を思  
ふ心は」

やまきり (名) 植まらじろ(裏白)の  
異名。織留「正月の掛鯛の山草、少し  
枯ると思へば」はしりどころ(裏若)  
の異名。田わられん(黄連)の異名。

やまきり 山公事 (名) 山林などに  
關する訴訟。櫻陰比事「此の堂の事第一  
争ひ、訴訟差上げ山公事に取結びぬ」  
やまきり 山下 (名) 里にて伐りた  
る木を、川に流しなすところ。山の方へ下す  
こと。又、その木。新勸撰集「何となく朽  
木の梢の山くだし、くだす日ぐればねぞ  
泣かれける」

やまきり 山口 (名) 山の上りく  
ち。山の入りくち。祝詞式「山口(名) 坐  
皇神等前山(名) 宇津保傳「我れ等日の  
本まで送り奉らまほしけれ、山ぐちを  
だに出でぬともがらなれば」鷹狩に、  
狩りせんとして先づ狩場に入る。又、

その所。花編 照棟集「荒寒の心とりかふ  
山口に、しるくぞ見ゆる今日の御狩場」  
目物事の最初。物事に入るはじめ。第一  
著手。きざし。前兆。兆候。蜻蛉日記「  
いちじるき山ぐちならば、こながら神  
のけしきを見せよとぞ思ふ」源朝臣「  
れたる人の山口はしるかりけり」  
やまぢしるし 山口著「山かせぎす  
る者」山さちの有無を山の口より明か  
し知る義。きざし著しくあらはる。行  
先まで見ゆ。前兆疑ひなし。榮華「  
この御祈りの折りふししも悦び仕う  
奉りたること、やまぢしるしなど悦  
び申し給ふ」

やまぢしるし 山口著 (名) 紋所の  
名。きざし(儀)を見よ。  
やまぢしるしのかみのまつり 山口神  
祭 (名) 山より木を伐り出だす時、又  
は狩獵の時など、其の山の口にて山の神  
を祭る祭。太神宮式「山口神祭」儀式帳  
「山口神祭」吉日、山口神祭(物并行事)  
ちぼん(大内本)に同じ。老人雑話「大内  
介中周防の山口の城に居る、紙を大明へ  
遣はし、書物をすらせて取寄せけり、今に  
至りて山口本とも大内本とも云ふ」  
やまぢしるし 山口祭 (名) やま  
ぢしるしのかみのまつり(山口神祭)に同じ。  
儀式帳「木本祭(山口神祭)東鑑六文治二年、明  
年伊勢大神宮山口祭也」定家集「三百首多  
「里近き野邊の草より立つ鳥に、山口祭す  
るほどよし」

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩



(まるごま)

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩

やまぢしるし 山猪 (名) 猪肉をいふ。  
隱語。皇都午睡「猪鹿の肉を、京橋にて  
鹿」と云ひ、山猪と異名すれど」  
やまぢしるし 山崩 (名) 地水の浸潤  
を受け、地層間の結合ゆるみて山壁の崩  
ること。やまつたみ。怪異辨録「山崩















































































































































る事あり。「さんよう」(算用)「ねんよ」(年預)の如し(但し現今にてはサンヨー・ネンヨと發音する事多し)。この音の由来はやの條二の(二)に説けるに同じ。

**よ** **夜(名)** 日没より日出までの稱。夕より曉までの間。よは。夜分。夜間。記「青山に日がかくらはば、ぬばたまの用は出でなむ」萬「風まじり雨ふる欲の、雨まじり雪ふる欲は」

**よ** **よ** 夜籠よをこむ籠夜に同じ。羽飯集「木のもとにこよひは寝なん櫻花、又よこめても散りもこそすれ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

る。夜に籠る。よにまじし。夜増 夜毎に増きり行き。日にまじし。若風俗「婦しき寢間を離れ、夜にまじし昔の氣力になりぬ」

**よ** **よ** 夜籠よをこむ籠夜に同じ。羽飯集「木のもとにこよひは寝なん櫻花、又よこめても散りもこそすれ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

夕暮に、よをしる鳥の影ぞほのめく」よをすつ 拾夜 夜をあとに見捨つ。夜をも顧みず。枕「しばしや、など、さ夜を捨てて急ぎ給ふ、とありて」

**よ** **よ** 夜籠よをこむ籠夜に同じ。羽飯集「木のもとにこよひは寝なん櫻花、又よこめても散りもこそすれ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

て見るには咎なきも、我がものと打ち頼むべきを選ばんに、多かる中にもえなん定むまじかりける」十訓「人の身の上にかまざる苦しきあり、これを不忍ば世に立ちぬる可からず」統治者の主権を維持して、其の國を治むる期間。又、家督を相続して、其の家を治むる間。代々。年代。舒明紀「汝祖等中以威光傳於後葉」萬「古へに君が三代へて仕へり、吾が大君は七世。申さね」古今「年はももとせ餘り、よは十とぎになんりける」特に、同一系統又は同一の政體に於ける主権者が、相承して國家を治むる時代。時代。「武家の世」徳川氏の世。「漢の世」共和政治の世。盛衰記「六本平家を討ち失うて、世を取らばや」世評。宇津保傳「五のみこのよをよもし給はず、みかど。さきも物さきこえ給はぬ人の」拾遺傳「忍びていひ契りて侍りける事、よにきこえ侍りにければ」榮華傳「世の響きにより、引きたがへおほしおきつるにこそあらぬ」主権者が治むる領國。國家。く。又、其の政治。榮華傳「世のいそぎに、御暇もおはしませぬ」十訓「呂尚が周文の車に乗りし、即ち世を治むる器たりき」續古事談「世の亂れをなほして」世界現象。世間の有様。よがら。世情。世態。榮華傳「世の物語り申しけるついでに」十訓「世も今少しあがり、人も才能いみじかりける故」世間の趨勢。世の風潮。時流。時勢。源「いかにもいかによに靡き給へらんを」榮華傳「人とひとしくならんと思ひて、世に従ひ物おぼえぬ道従を」因循人の一生。生涯。一期。記「沖つ鳥鳴とく鳥に我があねし、妹は忘れじ余能許登春登」に」

**よ** **よ** 夜籠よをこむ籠夜に同じ。羽飯集「木のもとにこよひは寝なん櫻花、又よこめても散りもこそすれ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

よにわはいまだ見ず、ことたえてかく面白く驚へる袋は「宇津保傳」ここによをすげさんと思ひて「因」とし。よはひ。年輪。い。ち。推古紀「よるづ余」にかくしもがも、ち余」にもかくしもがも「萬」も世しも千代しも生きてあらめやも、吾が思ふ妹をおきてなげかむ」

**よ** **よ** 夜籠よをこむ籠夜に同じ。羽飯集「木のもとにこよひは寝なん櫻花、又よこめても散りもこそすれ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

よととも 世共 世と終始すること。世の限り。命の限り。大和物語「一生に男せでやみまんといふ事を、よとともにいひける」

**よ** **よ** 夜籠よをこむ籠夜に同じ。羽飯集「木のもとにこよひは寝なん櫻花、又よこめても散りもこそすれ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

よににす 不似世 世のつねに似ず。世にたぐひなし。絶世なり。竹取「かぐや姫かたに世ににすめでたき事を、みかどきこしめて」

**よ** **よ** 夜籠よをこむ籠夜に同じ。羽飯集「木のもとにこよひは寝なん櫻花、又よこめても散りもこそすれ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

よのかため 世間 天下を治め固むること。一世の重鎮。又、その人。宇津保傳「さなき人は、よのかためとするなんん悪しき」源「おほやけに仕らまつりて、はかばかし世のかためとなるべきも」

**よ** **よ** 夜籠よをこむ籠夜に同じ。羽飯集「木のもとにこよひは寝なん櫻花、又よこめても散りもこそすれ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」

**よ** **よ** 夜直 夜ちゆう、ひたすら。夜もすがら。古今「わが如く物や戀しきほととぎす、時ぞともなく夜ただ鳴くらん」夜籠「夜籠よをこむ籠夜に同じ」











































よこれつら 汚面 (名) よこれたる顔。太紙全集、鹽鏝や旅はるはるのよこれ面

よこれめ 汚目 (名) よこれたる部分。又よこれたる程度。汚れたるあつ

よこれもの 汚物 (名) よこれたる品物。垢つきたる衣服など

よこれる 汚 (自動) よこれる(汚)の口語

よこれんじ 横櫃子 (名) 櫃子のことを横に取りつけたもの

よこれんぼ 横懸慕 (名) 配偶者の定まれる人に、横合より他人が懸慕を仕かくること

よころ 横縞 (名) 縞の一種。縞縞に對して、織目の横に透きたるもの。即ち、普通にいふ縞

よころ 夜頃 (名) 數夜かの夜。此の頃、毎夜、數夜此の夜。數夜、顯綱集「よころ物語り」などして明かす

よころ 幾夜かの夜を經たること。又、その夜、拾玉「よころ」を忘れがたみのうり香も、夜ころになれば遠ざかるらん」拾遺愚草「池のおもは水りやはてん、とちそむる夜ころの敷を又し重ねば」

よころ 横轉 (自動) 横にころぶ

よこわ 横輪 (名) 次條の略

よこわが 横輪艇 (名) 艇の一種

よこわたし 横渡 (名) 横に彼の地へ渡すこと。水路を横斷して向かひへ渡すこと。東海道名所記「船に乗りて、横わたしに大津につく」二代男「品川の片原町にて中津横渡しに山谷へ上がりて」

よこわ 横繪 (名) 横廣に描きたる繪

繪。又、横に表具したる繪の幅。御飾記「八景の八幅、横四幅一對の横繪」同欄の上の小壁に、ちひさき横繪二幅かかる

よこよ 夜聲 (名) 夜のこゑ。夜中に聞こゆる音。萬葉はや人の名におふ夜音「よこよいぢろく、君が名のらせつと頼まむ」同註「ほととぎす夜音」なつかし、細さきは花は過ぐともかれず鳴かなむ」

よこよ 夜聲八町 夜はあたりが静かなれば、小聲にていふ事も遠方まで聞こゆるものなること。ささやき三里。こそこそ三里。源浮葉「あなま給へ、夜聲はささやくしもぞかしまましき」

よこよ 横折 (自動) よこよる(横)を見よ

よこよる 横折 (自動) 「前條の轉」横に折れ曲がる。爲忠集「天の原連なり渡る初雁は、雲すぢかふて横折れにけり」東海道名所記「西の方に横をる道あり」

よこよる 善 (名) 推古記「善」萬葉「神武紀」利「善」推古記「善」萬葉「善」長く川に向き立ちありし袖、こよひまきなむと思ふが吉沙也」

よこよる 夜 (名) 上夜に同じ。「二夜」三夜「五十年忌歌念佛」夜さ來いといふ字を金紗で縫はせ」松風村雨東帶經「夜の泊りは何處泊りぞ」

よこよる 夜 (名) 小唄なりのかけ聲。津國女夫池「水の哀れや、よこよ、よこよ」

よこよる 餘材 (名) 餘る材木。餘りたる材料。用ひ残りの材。餘の木材。それ以外の材料

よこよる 餘財 (名) 餘る財寶。あまの財產。餘餘の金錢。餘寶。孫子丸「吾士無餘財、非經貨也」史記「家無餘財、終不言家産事」餘の財寶。其の外のたから

よこよる 餘罪 (名) あまされる罪

つくぬひきれぬ罪惡。史記「死有餘罪」餘の罪科。外のつみ。本罪以外の罪。主罪以外の罪科

よこよる 豫想 あらかじめ想像すること。かねて推し量り思ふこと。又、その思ひ

よこよる 豫想外 豫想の外に出づること。豫想にはづること。思ひの外。意外

よこよる 世盛 (名) 時の勢ひを得て繁昌すること。極盛の時期。平家一元「此の禪門世盛りの程は、聊ゆるがせに申す者なし」義經記「平家平家よさかりにて候に、一節の盛んなること。若盛り。盛衰記「西宮へ入道殿世盛りにて失せられぬ」長町女腹切「お花、世盛り、懸盛り」

よこよる 興作頭巾 (名) 頭巾の一種。専ら鳥取等を用ひて仕立つ。守備

よこよる 興作節 (名) 江戸時代の小唄節の一種。此の一本、三興作節の小唄に、そちでこそ道徳と唄ふ

よこよる 夜櫻 (名) 夜の櫻。夜見の櫻の花。諸宮小倉の山陰に残る夜櫻の花の枕

よこよる 次條の略

よこよる 土佐國高知より起りたる俗曲の節の名。元禄頃より行はれはじめ、弘化頃大に流行したるもの。歌の終りによこよといふ聲したるよりいふ

よこよる 善 (名) よさ(善)に同じ。神樂舞「みしれ春く、をみなよよさ」

よこよる 寄 (名) 古語。よさすこと。よさしたる務め。又、其の任所。任務。任せ。欽明紀「當番屏之任」

よこよる 寄所 (名) 古語。よさしたる地方。任所。任地。まげところ

雄略紀「之任所」

よこよる 寄 (他動) 「寄すの延」古語。寄せ給ふ。任せ給ふ。任務を付與せらるることよさす。任せ給ふ。寄托せらる

よこよる 神代紀「神代紀」三子日「續紀」吾孫將「知食國天下兵與佐斯」奉麻樹麻爾「祝詞式」皇神等依依(奉)奉麻樹麻爾「年」所封

よこよる 豫察 あらかじめ察し知ること。又、その推察

よこよる 匏葛 (名) 匏は蔓ある草なればつらといふ。「植ひさこ(匏)の古名。神代紀「天吉葛、此云阿摩能與佐圖羅(匏)」

よこよる 夜敏 (名) 次條の略。今宮心中「表をよう締めて、夜ざとに寝や」槍權三「宵から休ませ、夜ざとに留守をいひつやれ」

よこよる 夜敏 (形) いざとし(寢)に同じ。三代男「夜ざと親仁」博多小女郎波枕「心たままざりや夜ざとく成つて、身だまじり共せなせ」

よこよる 善様 (名) よささま。よきやう。よき方。源盛「さらぬ事だに、人の御ためにはよき」さまの事をしもしもいひ出でぬ世なれば」同々「人の御名をよさまにいひ直す人は難きのなり」

よこよる 夜寒 (名) 夜の寒きこと。秋など、夜になりて寒くなり行くこと。又、その寒き。又、その時節。寒夜。宇津保「秋の頭をば、よさむに心ほそきを」後拾遺「よさむに旅の空に鳴く雁は、おのが羽風や夜さむなるらん」

よこよる 夜寒燒 (名) 明治廿四年名古屋市中區東古渡江江二郎が夜寒の里にて焼き始めた陶磁器。支那風を模し温雅なる趣あり。染附の磁器最も巧みなり

よさめ 夜雨 (名) 夜降る雨。夜の雨。夜雨。高直去村雨の古屋の軒の板庇、目ざます程の夜雨や

よさめ 夜雨 (名) ゆさゆさに同じ。狂言「皆紅の扇の目を出したるを、舟のせがいによさよと狭みたて」

よさめ 夜晒 (名) 夜、外にさらしおくこと。又、そのもの

よさめ 夜 (名) よ。よる。ようさり。竹取「よさり此のつかさまにまうで」宇津保「よさりの御まかなひは式部卿の女御」

よさめ 夜なか 夜夜中 よるよなか(夜夜中)に同じ。榮華「よさり夜中ばかりにおはするにも、我れは大殿ごもらで、よるづをまつりごち給ふ」

よさめ 夜方 (名) 夜さりの頃。夕方。ようさりつつかた。宇津保「よさりつつかたになりぬれば、大宮に御遊殿まゐる」伊勢集「院の御遊ににおはしまして、よさりつつかた歸りおはしなさんとしけるをり」

よさめ 寄 (自動) よせる(寄)に同じ。萬葉「遠しとよこのしらねにあほしだも、逢はなへしたもなこそ與佐(寄)」

よさめ 餘算 (名) 餘りの數。殘餘の數。「餘命の數。餘命。殘生。即詠「醉對落花」心自靜、眠思「餘算」涙先紅」方丈記「一間の月影かたぶきて、餘算山の端に近し」

よさめ 豫算 あらかじめ計算すること。又、その數。又、かねての目算。耶律楚材詩「雄才龍「豫算」大略固難」豫國家又は地方自治團體等が財政監督の方法として、次の會計年度間に於ける收入・支出を豫め計算したる表。國家にては各省の豫定經費要求書に基き大藏大臣調製し、閣議を経て帝國議會に提出し、議

會之を議決し、裁可・公布を経て成立し、地方自治團體にては執行機關にて調製し、議決機關の議決を経て成立す。行政官府又は執行機關は此の表の範圍内に於て收支をなすべきものとす。大日本帝國憲法第六十條「國家の歲出入は、毎年度豫算を以て帝國議會の協賛を経て」府縣制「豫算は豫算の協賛を経て」

よさめ 豫算超過 收入又は支出が、豫算の款項に掲げたる額より超過すること。會計検査院法「豫算超過又は豫算外の支出」

よさめ 豫算不成立 豫算が豫算案を帝國議會に提出せざること。豫算案を帝國議會にて討論・議決せず、又は解散・停會若しくは否決等によりて裁可を請ふに至らざるか、又は議決して奏請するも裁可なきかの場合の稱。然る時は前年度の豫算によるべきものとす

よさめ 豫算 豫算案(名) 豫算の草案。豫算案を帝國議會に提出して未だ其の議決を経ざるか、又は其の議決を経るも未だ裁可なき豫算の稱。議院法「豫算案の議定」

よさめ 豫算案(名) 豫算の草案。豫算案を帝國議會に提出して未だ其の議決を経ざるか、又は其の議決を経るも未だ裁可なき豫算の稱。議院法「豫算案の議定」

よさめ 豫算案(名) 豫算の草案。豫算案を帝國議會に提出して未だ其の議決を経ざるか、又は其の議決を経るも未だ裁可なき豫算の稱。議院法「豫算案の議定」

よさめ 豫算案(名) 豫算の草案。豫算案を帝國議會に提出して未だ其の議決を経ざるか、又は其の議決を経るも未だ裁可なき豫算の稱。議院法「豫算案の議定」

よさめ 豫算案(名) 豫算の草案。豫算案を帝國議會に提出して未だ其の議決を経ざるか、又は其の議決を経るも未だ裁可なき豫算の稱。議院法「豫算案の議定」

あげかんちやうしよ(試算書)に同じ

よさめ 豫算書(名) 前條に同じ

よさめ 豫算送状(名) 前條に同じ

よさめ 豫算外 豫算に費用を掲げざること。又、そのもの。會計法「豫算外に生したる必要の費用」豫定又は豫想の外

よさめ 豫算委員(名) 貴族院及び衆議院の常任委員の一。政府より提出したる豫算案を審査して、其の議院に報告するもの。議院法「政府より豫算案を衆議院に提出したるときは豫算委員は其の院に於て受取りたる日より二十一日以内に審査を終り議院に報告すべし」

よさめ 由(名) 物事のよりに起る理由。原因。子細。ゆゑ。崇神紀「極致災之所由也」萬葉造りおけるゆゑ(由)開きて「落窪」親しき人の迎ふるにもまからざりつれ何のよりにかこと君どりはし奉らん」わがけがら、事から、おもむき、いはれ、次第。由來。由緒。事情。竹取「御文、不死の藥の毒ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。其のよし承りて」土佐日記「その年はすの甘日餘り一ひの戌の時に門出す、そのよしいささか物に書きつく」

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ

よさめ 止(名) 止すこと。やむること。太平記「磯邊宮を害せんと物語り、よしにといはば即座に切られ」よしにす 爲止やめにす。やむ。よ



















**よせむし** 寄襲 (名) 兩膝の中通りに、ひだを細く寄せて仕立てたる袴。麻上下にあり、再訂江戸總旗子新増大全七通、麻袴ひだ手を付けず、立居にひらかざるやうに、袴の前ひだ中へ寄せて仕裁つる、是れよせむしの初め也。

**よせむし** 寄拍子 (名) 寄太鼓を拍子拍子、諸般攻め鼓、よせ拍子とよう打ち給へり。

**よせむし** (名) 植あせび(稷木)の異名。よせむし 寄文 (名) 寄通又は寄託の旨を記して、證となす文書。今鏡鑑親の譲りたる所を取り給ひけるをからく思ひけるほどに、よせ文を奉れ、預けんなど侍りければ、東鑑文(寄附木田寄文云)「よせむし(寄書)の和調。人に送る文書。」

**よせむし** 寄宮 (名) 数多の神社を一つに合祀したる宮。續無名抄「邪神・淫祠かこぼち、正しからぬ社を一つに寄せて、是れをよせ宮と名づく」

**よせむし** 寄棟造 (名) 大棟と四つの隅棟とを有する屋根の造り。又、四つの隅棟が一箇處に集まるやうにせる屋根の造り。

**よせむし** 夜攻 (名) 夜、夜襲。安土日記信長御所御番之事中、御手の口より夜攻に可仕旨被仰出候。

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

の時、守介・孫・目等の関官を抄出して、執筆の人の心算に持参する文。江次第四寄物文中、寄物(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日

**よせむし** 寄物 (名) 寄せもの(寄物文)の略。江次第四寄物文中、寄物、近例如本入(視宮)料理の。魚類の猪肉・麥粉・薯蕷・百合・雞卵・甘藷葛粉等の材料を種種に調合し、適宜に味をつけて煮、寒天にて固め、羊羹の如くしたるもの。口取又は焼肴の添物に用ふ。

**よせむし** 寄物文 (名) 除日















裁つこと。又、その裁ちたるもの。

よつめ 四目 (名) 四方形を四つ合は

せたる象。よつめゆひ(四日結)の略

目紋所の かねたて四目(四日結)の略

名。かど

よつめ 夜詰 (名) 夜間、詰めかけ

て攻むること。夜攻。庭訓往來六月夜詰

後詰者陣旅之軍政也。運歩色葉、夜詰

夜間、詰め居ること。夜、君側又は役所

などに出動してをること。夜番。職府政

事録三十一日。自今夜、近習之輩、御夜詰御

教免。若風俗、御夜詰め過ぎて、御歸り

委見ゆるまで。

よつめ 夜爪 (名) 夜、爪を取る

俗間之を禁忌す。

よつめ 四目 (名) 四方形を以て

目の方形なる格子。

よつめ 四目垣 (名) 竹垣の一

種。丸太を立て、竹を粗く縦横に互して

結ひたるもの。其の隙目が方形なればい

ふ。

よつめ 四目錐 (名) 錐の一種

刃に四つ角あるもの。三つ目錐などの

對、取つて見れば四つ目錐なり。

よつめ 四目崩 (名) 紋所の

名。

よつめ 四目車 (名) 紋所の

名。

よつめ 夜音 (名) 夜間こゆる音。夜の



よつめ

名。よつめ(四目)を見よ。

よつめ 四目殺 (名) 碁盤の

目の上に雙方互ひに碁石をならべ、我が

四箇の石もて相手の一石を圍む時は打ち

取り、かくして其の数の多き方を勝ち

とする遊戯。目碁。碁節用(碁五ヨソ)

綴五。

よつめ 四目入道 (名) 眼

の四つありといふ俗形の妖怪。

よつめ 四目矢 (名) 碁のかぶ

りに、四箇の目をあけたる矢。

よつめ 四目結 (名) 目ゆひを

に結びたること。又、その結びたるもの。

よつめ 四目結 (名) 目ゆひを

四つ結べたること。蛇の目を方形にしたる

如き象を四つ描きたるもの。貞治六年中

殿御會記、佐佐木佐渡二郎左衛門尉明秀

地百箇、太平記十六箇、四目結(中)

傍、かかりの輪違の旗。

よつめ 四物 (名) 四箇を以て一

具ひとしたるもの稱。四種の武器。

よつめ 四門 (名) 昔時の遊廓に

ちまはる太鼓を相圖にて大門を閉づること。

よつめ 四時 (名) 昔時の遊廓に

ちまはる太鼓を相圖にて大門を閉づること。

よつめ 四時 (名) 昔時の遊廓に

ちまはる太鼓を相圖にて大門を閉づること。

よつめ 四時 (名) 昔時の遊廓に

ちまはる太鼓を相圖にて大門を閉づること。

よつめ 四時 (名) 昔時の遊廓に

ちまはる太鼓を相圖にて大門を閉づること。

よつめ 四時 (名) 昔時の遊廓に

ちまはる太鼓を相圖にて大門を閉づること。

よつめ 四時 (名) 昔時の遊廓に

【動】昆蟲類中、有翅類の一種。浮塵子(カ)

の一種。體の長さ六七厘、淡黄緑色を呈

し、頭頂より胸部に互りに四箇の楯紋あ

り。稻を食害す。

よつめ 四谷紙鳶 (名) 江戸

時代、四谷より出だすとんびだ。普通

のとは形少し異なるもの。燕石標志(カ)

よつめ 四谷丸太 (名) 丸太

の。皮を剥ぎ、酸皮にて磨きたる杉丸

太。武蔵國多摩川荒川開

の高地に多量に産す。軒

桁、床柱、舟棹又は下

圓の如き風流なる四つ目

垣の柱などに用ふ。

よつめ 夜露 (名) 夜間におく露。若

風俗、此の道に夜露は厭はじと、菅笠ぬ

ぎ給ふ。

よつめ 四雪 (名) 植でんじきう

の。積の異名。

よつめ 四結 (名) よつめゆひ(四

目結)と同じ。藤葉茶袋記「四つ結の旗さ

し」。

よつめ 四占 (名) よりうち寄占に同じと。

よつめ 夜釣 (名) 夜、釣りを垂るる

こと。又、その釣り。浦島年代記「浦島太郎

よつめ 四輪鼓 (名) 紋所の名。

よつめ 夜鶴 (名) よるのつる(夜鶴)

と同じ。よる(夜の)條を見よ。諸本、燕子

よつめ 四割帯 (名) 帯地の

よつめ 夜床 (名) 夜間に寝る

よつめ 夜床 (名) 夜間に寝る

よつめ 夜床 (名) 夜間に寝る

よつめ 夜床 (名) 夜間に寝る

よつめ 夜床 (名) 夜間に寝る

幅三寸ほどの女帯。文祿・慶長の頃行は

れたるもの。大幣田里京では一條柳屋

が娘、よつわり帯をたすきにかけて」

よつめ 四割菱 (名) 紋所

の名。ひし(菱)を見よ。田たけだびし

よつめ 四井 (名) 相撲にて背の稱。

相撲今昔物語「相撲山崎山崎、背をとる

よつめ 四結 (名) 鍔の袖に著きたる

緒。即ち、懸緒(カ)と請緒(カ)のこと。伊勢一説、

懸緒、請緒、しつかの緒、水春の緒の稱。

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)

よつめ 四手 (名) 相撲にて投(カ)掛(カ)



































の世話をするもの。持高のみにて役料なく、在職中寄合の上席に居り、小普請金を免ぜられ、柳の間に何候す。徳川禁令考十七頁三三「寄合肝煎五人被仰付、以来同席之者共、職務其の外諸事取締り之儀迄も、萬端世話可致旨申渡す」

**よりあひさん 寄合金 (名)** 寄合金。寄金の多寡に従ひ、百石に小判二兩の割合を以て毎年上納する金。寄合の小普請金。東職記開「寄合金方にも、よりあひさんとて、百石二兩の金子を召しあぐる也」

**よりあひさんじやうなふしはい 寄合金上納支配 (名)** 寄合金の上納の事を取り扱ふ役。明良帝録「寄合金中、小普請金を上納す、百石二兩の割合なり、安永之頃迄は寄合金上納支配といふ役有り、今は止む」

**よりあひくみ 寄合組 (名)** 寄合肝煎の監督の下に、寄合を以て組織せる組。五組に分かつ。よりあひ(寄合)を見よ。獻可録「寄合組大勢打込み、若年寄之支配に而御座候」

**よりあひしゆら 寄合衆 (名)** 鎌倉幕府の職名。執權及び評定衆と共に職務を評議するもの。其の例式なる評定の席に臨まずして、寄合の席に列なり内職論定するより此の稱ありといふ。北條九代記下「正時村左衛門大夫、正應二年五月爲寄合衆」三「よりあひ(寄合)に同じ。東武實録五月廿七日「寄合衆」

**よりあひしゆら 寄合備者 (名)** 江戸幕府の職名。儒役林家の門人の内、學識あるものを以てこれに補し、儒役を補佐して歴史の校讐、月並の通講、諸志の編纂、學生の教授、圖書の起草等に與るもの。若年寄の支配に屬し、二百俵高とし、布衣以上に昇るものは三百俵に至り、何れも十五人扶持の手當を給せらる。平日は番直なく、事あれば命を承けて出仕す。

**よりあひなへ 寄合備 (名)** 幾組かの士卒の寄り合ひたる備。初井日記「寄合備者、寄合備衆は輩名、平林、波賀野を陣別として、一千餘騎を三手分け候て」

**よりあひだし 寄合出 (名)** 種類の品物等を持ちよりて其の席に出すこと。二代男「寄合出しの振舞ひ」

**よりあひどころ 寄合所 (名)** 寄合の場所。集まりよる場所。義經記「此の坊は諸人のよりあひ所なり」

**よりあふ 寄合 (自動)** 互ひによる。寄り集まる。參集す。集合す。萬葉夕づく夜かたち奥里安比「あまの河、こく舟人を見るがともしき」十訓「人の寄り合ひて打ちささやきなどせん所」

**よりいた 寄板 (名)** かみよりいた(神寄板)の略。新和歌集「何事を松の嵐も思ふらん、をりをり叩く神の寄板」

**よりいと 経糸 (名)** よりをかけたるいと。又、より合はせたる糸。片経糸と経糸とあり、前者は左又は右の方向に経二本以上を引寄せ反りの稍強き片経糸より引寄せたるものをいふ。薩摩歌「互ひに心懸け袖の縁に経糸掛り袖」源氏十二段長生鳥臺「紅の経糸にて小菱組みたる厚綿」

**よりうら 餘流 (名)** 本流より分かれたるながれ。えだながれ。支流。運歩色葉「餘流」。蘇軾詩餘流不敷、遠勢競相參

**よりうと 寄人 (名)** 記録所及び文殿等の典義より、選筆の職。古法を明らかに説れる者より、西宮記「當代後院中納言勅公文寄人等」百餘抄「兵部入

月十始置、記録所庄園券契所定寄人等」職原抄「院司、文殿、選筆、寄人」和歌所の職。和歌を撰定することを掌る。召人。公武歌合撰集のみことり侍りし時、和歌の浦の浪のよりうとの數に定まり侍りしに「明月記」(元暦)「和歌所」可著到之由中書省寄人名於其端二、目録倉・室町幕府の政所・問注所侍所の職員。執事の下ありて雑務を行ひ、執筆の事を掌るもの。東鑑「十四日、掃部允藤原行光加、政所寄人二、武政、範範、開闢事、當手寄人中、以右筆上首被仰付之」

**よりうら 寄占 (名)** 神の寄り給ふ占。よつら。

**よりおや 寄親 (名)** 寄りは寄寓親(親方の義)。奉公人の身元引受人(寄子の對)「甲陽軍鑑」念比を受けたる寄親なりとも「手を取らず成敗にあへば、笑止顔もなく寄親の儀を誹り事」竹齋物語「寄親まで一筆殘さん」劇場にて藝師の親方の稱。一「板元」(一)といひ、其の配下の藝師を板人(二)といふ。

**よりかり 倚懸 (名)** よりかりかること。又、腕を懸けて寄りかかるもの。中古の箱の如くして蓋有り、蓋の上に鳥の羽を入れ、糸を絞にて張り、中には手道具を入るやうにしたり。貞正「正倉院御寶物之圖」御懸懸(尺七寸三分六厘、女房腰條條)よりかりは中に蓋をこめて上は蓋也、むしろは縁をさして、女房よりかり程にせりなり、高さ八寸五分計り、人のせいにしより。曰「よそく(脇息)に同じ。乳母草子「御懸の際に御手箱よりかりかり、御さうしの箱」愚抄抄「老翁中書省のよりかりかりに、虎皮を松下の石殿に敷きて(外懸の外懸)の名どころ。そととも(外懸)を見よ。

**よりかりたい 倚懸臺 (名)** より

かかるだ。よりかり。本朝二十不孝「産屋の倚懸臺、大枕まで揃へて」

**よりかか 凭掛 (自動)** よりそひよりかかり給へとて前によりふせば「枕よりひさしの柱によりかかりて」

**よりかき (名)** 糊を張る具なりと。本林節用録「糊張」

**よりかく 経掛 (他動)** 経よりてかく。古今「二片経をこなた彼方によりかけて、あはずば何を玉の緒にせん」榮華「御ぐし中、なよなよよりかけたるやうにて」

**よりかぐる (自動)** よりあひて婚す。近寄りてくながひす。一説、萬葉の歸はゆきとよみかぐればかぐひの誤りなりと。古語「萬葉の火に入ること、湊入り」船漕が如く、歸香具「人の言ふ時」

**よりかけ 経掛 (名)** 糊に経りを施し、密著せしめて一本の生糸となすこと。

**よりがら 擇殻 (名)** よりくづ(擇屑)に同じ。

**よりからし 擇殻 (名)** 前條に同じ。

**よりき 寄木 (名)** 流れ寄りたる木。つきてま(名)「神の寄り来ます、憑りつきてまのいふ故に名づく」かこ(神子)の稱。

**よりき 與力 (自動)** 加勢すること。助力すること。宇津保書「天地神よりきし給はば」平家「武士には多田藏人行綱を始めとして、北面の者共多く與力してけり」至町時代同心と同じ、其の家に附屬する士、即ち、被管の士の稱。後には附屬の大名をもいひ、織田・豊臣時代には侍大將・足輕大將などに附屬する騎士をいふ、因りて寄騎とも書せり。運歩色葉「與力」翁草「與力・同心の號、中古

は大家の庇下に屬する大名を誰某の與力と云ひ、諸士の隊長に従ふ者を同心と云ふ」江戸時代、幕府の諸奉行・所司代・城代・大番頭・書院番頭等の諸吏員の配下に屬し、同心を指揮して上官の事務を分掌・輔佐する職。俸給は概ね百五十俵より二百俵高、現米六十石より八十石高とす。藩制「大御所の御時に、右兵衛督殿・常陸介殿同じ、五拾萬石の地を參らせらる、其餘諸國の人人をつけらる、是れを寄騎衆と申ししなり」警中御日記「九月九日、大御番頭衆與力」憲教類典「三、九月六日、御留守與力」

**よりき どうしん (名)** 與力同心 どうしん(同心)の條を見よ。

**よりき どうしん をはなす 放與力同心** 戦國時代、諸侯が武士たる者を備へて、其の部下の士卒を率ふ。松隣夜話「越後の科人の御仕置中、五番與力同心を放さる中、長尾右衛門佐と云ふ侍大將、聊か無沙汰の行跡あるに依りて、謙信公大に咎め給ひ、與力同心を召放され、所領を取上げ」

**よりきり 寄切 (名)** 相撲の手の名。相手を追ひ込み、自然に土俵を踏み切らすもの。

**よりきん 経金 (名)** 金糸をより合せたるもの。一代男「経金の玉」

**よりくちら 寄鯨 (名)** 負傷し又は死して海邊へ漂ひ寄れる鯨。地方凡例録「寄鯨と云ふは、森を請け痛み或者死にたる鯨、漂流し、自然と岸へ寄りたるを濱へ引き上げ」

**よりくちらうんじやう 寄鯨運上 (名)** 寄鯨ありたる村方より納むる運上。地方大意「寄鯨運上三分一」

**よりくづ 擇屑 (名)** よりとりたる後

の殘物。よりがら。えりくづ。織留、波世は八百八品といふに、醫者は其の中のより層なるべし」

**よりくみ 寄組 (名)** よりあひしゆら(寄合衆)に同じ。

**よりくるま 燃車 (名)** 糸に撚りを掛する車。西北の風をいふ、北國の方言。燃車

**よりけ 経毛 (名)** 毛の細工の語。毛を撚ること。又、其の撚りたる毛。

**よりけ 選毛 (名)** 毛の細工の語。毛をえり分けること。又、其の選り分けたる毛。

**よりこ 寄子 (名)** 寄親に對して、奉公人の稱。又、配下。宇津保書「よりこどもひきつれてすみ侍る」新式目追加「所當公事、對擧事、右支配寄子等之處」

**よりこ 憑子 (名)** ものつき(物憑)に同じ。

**よりこ 縮筒 (名)** あめ縮筒をいふ、遠江安房、上總、常陸國の方言。

**よりこや 寄子屋 (名)** 雇人の受宿。

**よりす 寄洲 (名)** 河口又は海邊などに、水流と風波のために、泥沙の掃り寄せられて生じたる洲。

**よりすがる 寄籠 (自動)** よりそひてすがる。すがりつく。目刀と頼む。たよりすがる。

**よりすきや 燃透綾 (名)** やや強き綾糸を用ひて織りたる透綾。越後國魚沼郡の特産。

**よりそ 経麻 (名)** 撚りたる麻緒。

**よりそひ 寄添 (名)** よりそふこと。よりつくこと。持統天皇歌軍法「雪の中なる白梅の、すんすんとして寄り添ひのかたきは花の行儀かや」

**よりそふ 寄添 (自動)** そばへよる。よりつく。大徳狂言「橋の欄干に寄りそうて」五人女「吉三郎寄添に寄り添ひ」

**よりそめ 寄初 (名)** 昔時、芝居にて毎年十月十七日の夜、娘見世狂言極りの總役者の初め寄り合ふ式。劇場年中鑑「寄りぞめ、同じ夜、顔みせ極りの總役者、初めて寄合の名なり」劇場新話「顔はなしぞめといふは十月十七日也、本名寄初といふ」

**よりそり 寄反 (名)** つたへぞり傳反に同じ。

**よりだづ 寄道具 (名)** 人を寄せずして捕ふるに用ふる具。十手、刺股(一)突棒(二)の類。

**よりたけ 寄竹 (名)** 流れ寄りたる竹。それにて作れる笛は香美なりと。平家「寄竹より竹を柱とし」夫木「末のよと思ふも久しより竹はきりてぞ笛の音をも立てける」

**よりたし 寄出 (名)** 相撲の手の名。四つに組み、相手を追ひ込み、土俵際へ逃げ行きたるを、一寸押して軽く土俵より出すもの。

**よりたす 擇出 (他動)** より分け外に出だす。えりぬきて取り出だす。選ぶことをし始む。

**よりたほ 燃烟草 (名)** 葉烟草を繩の如くに紡ぎ、これに熱と壓搾を加へて製造したるもの。

**よりたがし 寄倒 (名)** 相撲の手の名。四手に組み、相手を追ひ込み、土俵際へ逃げ行きたる所を押して倒すもの。

**よりつき 寄附 (名)** よりつきつくこと。庭園等に設くる簡略なる休息所。

**よりつきねだん 寄附値段 (名)** 略。「十二錢の寄附きを高直に」

**よりつきさば 寄附相場 (名)** 次條に同じ。誠齋雜錄「寄附相場、寄附に米市の仕方は、毎日朝五時頃より相始め、先最初に、帳合延商ひ米仲買株の者と虎市米仲買の者と、數百人寄集まりて始むるを寄附相場と唱ふ、此の寄附相場は、たとへば何十何分と初めに題を出す、是れ則ち前日火繩消の時の相場を用ふるなり」

**よりつきねだん 寄附値段 (名)** 取引所にて立會ひ初めの手合せに出來たる直段。

**よりつき 寄附 (自動)** そばへ近りつき給はす。取引所にて立會ひ初めの手合せが成り立つ。寄附相場が成り立つ。

**よりつな 経綱 (名)** よりたるつな。経りは合せたる綱。夫木「浮橋に竹の経り綱うちへて、小舟並ぶるふじの川浪」

**よりつる 寄弦 (名)** 巫などが口寄の時、梓の弦を鳴らして神を降すこと。新猿樂記「現女也、卜神遊寄弦」由(口寄之上手也)

**よりて 依 因 仍 (接)** それによりて。其のために。それ故。よつて。千載「傳教大師は我がたつ楠の言葉を残せり、よつて世世の帝もこの遺をば捨て給はざるをや」

**よりてろ 據 (名)** よりたるべきところ。據りて本とする所。たよりとすべきところ。枕「かたはらなる子どもの心ちにも親のひるねしたるは、より所なくすま























